

特集●春闘の「あした」を読む

春闘からストが消え、闘いが消え、そして世間相場が消えた。定昇確保や一時金では、何が相場か分からない。他方で格差は拡大し、不平等を是認する傾向が強まっている。これでいいのか。

ストで電車が止まった頃

僕が社会人として春闘を最初に体験したのは昭和51年（76年）の春である。その春、大学を卒業し、ある会社に就職していた。浦和の独身寮に入り、日本橋にある会社まで毎日、まじめに通勤していた時のことである。

その年の春闘は、高梨昌教授の『変わる春闘―歴史的総括と展望』（日本労働研

究機構、02年）によると、ロッキード疑獄

事件により国会が長期間空転し、景気はオイルショックによる不況から回復基調にあったが、雇用改善は遅れるという情勢で闘われたらしい。春闘共闘委は春の賃金交渉はじまって以来、初めて前年を下回る賃上げ要求基準を設定し、労働組合は賃上げと共に、雇用の安定を重点的にとりあげたとされる。ちなみに平均賃上げ率は8・8%であった。



中村圭介／東京大学教授

春闘変容と不平等是認の風潮

こう書いてみると、穏やかに春の話合いが進んだかのような印象を持つことであろう。とんでもない。この年も国鉄はストライキを予定していた。僕はストライキ予定日は当然、会社は休みだと思っていた。といっても、交通機関はすべてストップするから、寮で寝ていようかなどと勝手に考えていた。

甘かった。会社はなんとバスをチャーターし、朝の三時に起床、そのままバスに乗ることになっていた。朝食はバスの中で、会社から支給されたパンと牛乳ですませた。それでも会社に着いたのは九時すぎだったと思う。布団を借りて会社に泊っていた先輩もいた。ストライキの解除とともに、他の社員たちがパラパラと会社に着いてくる。休んだ人もいたけれど、結構多くの人が出社していた。でも、疲れてしまって、仕事にもならない。そんな一日だった。

この一日で社会人の厳しさを実感したかという、そんなことは少しもなかった。

た。仕事にならないのだから、休みにすればいいのと思っただけであった。生意気な社会人一年生である。国鉄や一部の私鉄がストライキで止まるのは春の年中行事だったし、学生の頃は学校は休み

になっていたからである。当然、組合はけしからんなどとも思わなかった。そのおかげで給料が上がるのを知っていたからである。

消えた「世間相場」

あれから二八年である。四半世紀をこえた。生意気な社会人一年生は一年で会社を辞め、あいかわらず生意気なまま、なぜか労働問題の研究者になっている。他方で、春闘はまさに様変わりである。

先日、東京都立労働研究所の報告書『転換期における労働組合の役割』（93年）を読んでいたら、組合役員二四四人中、ストライキに参加したことがあると答えた人は一〇六人、43・4%であった。45歳以上では73・2%の組合役員がストライ

キに参加したことがあると答えているが、44歳以下ではその数、わずかに34・6%である。春闘のストライキも激減し、春の話し合いになってしまったから仕方ないかもしれない。

自分自身のことではないけれども、心配になってしまった。伝家の宝刀はさびついてしまっているのではないか、さらに、刀の振り方さえ忘れてしまっているのではないか、あるいは刀があることさえ気が付いていないのではないかと。

連合総合生活開発研究所の『労働組合に関する意識調査』（03年）によると、労働組合をつくるのが法律で定められている労働者の権利であることを知っている人はわずかに44・0%。労働組合員である人も53・5%にすぎなかった。とすれば、ストライキをする権利があることを知っている組合員は半分以下で、少数派なのではないかとさえ思えてくる。

労働者の権利についての基礎的な講座を開き、実は伝家の宝刀を自分たちは持

っているのだよと教える必要はないのだろうか。そしてストライキの組織の仕方といった講座を開き、ロール・プレイングなどを通じて、刀の磨き方、振り方を教えておく必要はないのだろうか。

ところで、今年の春闘である。企業業績は明らかに上向いているようである。だが、ベースアップなしのところも多く、定昇分をどうにか確保という新聞記事も多く見かけた。業績向上分は一時金で対応するのが大勢だそうである。

僕は当事者ではないので、そのこと自体をしたり顔で非難したり、批判したりすることはできない。労使の当事者が考え抜いた結果なのであろう。

だが、一つだけ心配ごとがある。このままでは相場ができない。春闘の最大の貢献は労働条件の世間相場をつくり、それを組織セクターだけでなく、未組織セクターにまで波及させるメカニズムをつくりあげたことだと僕は考えている。だが、「賃金カーブ維持分」とか定昇確保と

だが、今日では不平等の存在が問題だと考える人々が少なくなってきた。

これがドーア教授の最も言いたかったことだと僕は思う。

02年4月の本誌に、僕は「人間は生まれながらにして不平等である、機会の平等などは絵空事である」と書いた。不平等は競争の必然の結果ではない。だからこそ、不平等は問題であり、またそれができる限り小さくしようとする人の力が必要なのだと思う。

だが、もしドーア教授の主張が正しいとすると、そうした努力をしようとする人びとが減ってきていることになる。

絵空事の機会平等のもとで、「公平」な競争をした結果、不平等になっても仕方がないといふ人が考えるようになってきているのだろうか。世間が見えなくなり、相場もわけがわからないまま、各人が自助努力で労働条件を上げれば良いといふ人が考えるようになってきているのだろうか。労働条件を上げられないのは、他の人が

か、各社の一時金の金額をみただけでは、いったい何が相場なのかはわからない。

相場がわからなくなっただけでなく、世間もまたわからなくなっている。春闘が盛んであった時代には、世間相場という「世間」とは日本社会全体を意味していたように思う。それが80年代になると、世間は産業に変わっていき、今日では世間が消えてしまったかのようである。

その意味で、今年の連合要求5200円、生活保障水準840円(時間あたり)、35歳標準労働者の最低到達目標24万5000円は、ひさびさのヒットであるように思う。連合結成の最大目的は政策制度闘争強化であったから、少し軌道修正を余儀なくされたと言えなくもないが、しかし、世間が見えなくなってしまった今日では必要なことかもしれない。

競争社会と不平等

僕が世間相場を気にするのは、名高い日本研究者であり、社会学者でもある口

どのように努力しないからだと考えようになっただろうか。

格差是正 2つの条件

僕が心配するのは以上のことである。「春の闘い」は「春の話し合い」に変わり(僕はその変化を論評する立場にはない。したがって、非難するつもりも、批判するつもりもない。事実を指摘しているだけである)、世間も消え、相場もみえなくなった。

この状態が続くのであれば、春闘の最大の貢献がなくなってしまうことになる。したがって、不平等も拡大していくだろう。それとともに不平等を是認する意識が日本社会に広がる。あるいはドーア教授が指摘するように、すでにそうした意識が広がっている。だからこそ、世間も相場も見えなくなっているのかもしれない。これでよいのだろうか。労働組合は崇高な理念を持ち続ける必要などないのだろうか。

もつとも、次のように考えることはで

ナルド・ドーア教授の言葉が頭から離れないからである。ドーア教授の考え方については『日本型資本主義と市場主義の衝突』(東洋経済新報社、01年)が出版されているから、ご存じの方も多いと思う。

去年の暮れ、東京大学とILO(国際労働機関)との共催で「グローバル化と仕事の未来」をテーマに国際シンポジウムを東大キャンパスで開催した。ドーア教授は四つのセッションすべてで基調講演を行った。ドーア教授が是非とも伝えたかった点は次のことであるように思えた。

経済のグローバル化、金融の国際化に伴い、不平等、特に経済的不平等が拡大しつつある。それにもまして重要なことは、現実の不平等の拡大とともに、不平等を是認する、あるいは受容する傾向もまた広がりがつつあることである。不平等の存在それ自体は、決して、不平等を認めることではない。たとえ現実の不平等がどんなに大きくても、世界はこれまでに不平等の問題にタックルし続けてきた。

きる。90年代を通して、さらにこの数年で組織セクターと未組織セクターの間で、あるいは組織セクター内で、見えない格差が徐々に広がってきたかもしれない。

だが、景気が上向き、みんなに元気が戻った時に、広がってしまった格差を埋めべく、未組織労働者の組織化が一挙に進むかもしれない。組織セクター内の取り残された部分の労働条件が一挙に上がるかもしれない。

もし春闘が復活し、世間相場が再び形成されるようになったとしても、すでに生じた格差は見えないままだから、それを埋めるためには組織化、あるいは意識的な格差解消運動しかないだろう。

そのためには、次の二つの条件が満たされる必要がある。一つは、不平等の存在を是認する傾向を押し戻すこと、または不平等はやはり問題なのだと意識を広げることである。二つは、組織化のチャンスが拡大した時に備えて、体制を整え、戦術をみがいておくことである。